

農環研ニュース No.1

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-07-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24514/00007802

農環研ニュース

1984.7

創刊号

農林水産省 農業環境技術研究所

目 次

新任にあたって……………	1	「筑波農林研究団地新研究体制 発足記念式典」及び「農業環境技術 研究所発足記念祝賀会」の催し……………	7
退任にあたって……………	2	企画連絡室連絡科だより……………	8
農業環境技術研究所の概要……………	3	人 事……………	8
研究部の“科”紹介……………	5		
刊行物の紹介……………	6		

新任にあたって

所 長 久 保 祐 雄



設立後間もない農業環境技術研究所の坂井健吉前所長の後任として、5月16日に着任いたしました。

農業をとりまく厳しい情勢の中で、環境と農業生産との共生・発展を目指して、専門研究の深化、研究装備の確保、担当研

究者の資質の向上を計り、目標に接近するために努力を積重ねる覚悟しております。今後とも一層の御支援をお願い申し上げる次第でございます。

当研究所の発足は、関係各位の一方ならない御尽力に

よるものと感謝いたしております。とくに筑波では、昭和55年の東京キャンパスからの筑波への移転、昭和56年の農業研究センターの設立を経ての再編整備であっただけに、また、関係する場所が多く解決すべき問題が複雑で多岐にわたっていただけに、並々ならない御苦勞をお掛けいたしました。

農林水産技術会議の決定に基づく新研究機関設立準備推進委員会の委員、同環境小委員会委員長として、当研究所の組織、キャンパス等の諸問題の解決に指導的な役割を果たしてこられました坂井前所長、ならびに意を合わせて協力をいただきました所の皆様に敬意を表する次第であります。

当研究所の発足と同じ昨年12月1日には、「農林水産研究基本目標」と「農業関係研究目標」が制定されました。目下これらを踏まえての、当研究所の研究基本計画

作成の作業を推進中で、近く中・長期研究計画ができ上る運びとなりました。

当研究所では、①農業環境を構成する土壌、水質、大気、植生、昆虫、微生物等の諸要素、さらには肥料、農薬等農用資材の動態にかかる技術、②これらの上に立った複合技術、③生態系と調和した高生産性農業、農業環境情報の提供等の総合技術にむけての調査研究を4部、10科、49研究室で行なっています。



昭和58年12月1日、農業環境技術研究所の発足とともに、初代所長を拝命しましたが、僅か半年足らずで退職することになりました。農業関係試験研究機関の再編整備により、農業技術研究所の廃止、農業環境技術研究所の新設と、昭和55年7

月農技研所長就任以来、3年10ヶ月はアットという間に過ぎ去ったというのが実感です。

幸い農業環境技術研究所の研究推進体制並びに方向については、農業関係試験研究体制検討会の中間報告を受け、技術会議決定に基づく新研究機関設立準備推進委員会、同環境小委員会等の精力的な検討結果並びに発足と同時に決定された「農林水産研究基本目標」、「農業関係研究目標」により大綱が決まり、さらにまた続いて行われた各場所の研究基本計画（案）まで詰めることができ、聊かなりとも所長としての重責を果たし得たと自負している次第です。

農業環境技術研究所の研究基本計画（案）については、いわゆるピラミット構想に基づくサブ・サブ・システムを構築する各科について、科・室長と懇談会を持って進めたことは、大変印象深い思い出となりました。

これからは環境研の内容の充実と発展を図ってほしいわけですが、それには研究者個々の研究能力の向上が最も大切であることは贅言を要しません。それ以外のことですが、これからの研究推進上の人間関係について、2・3希望を述べ、退任にあたっての挨拶とさせていただきます。

研究は、農業生産をめぐる各現場からの諸問題および科学研究の一般的な発展の中からの研究シーズの発掘、普遍的法則性の追求、成果の公表の過程から成り立っていることは、今さら申すまでもありません。具体的な研究課題の発掘、設定の方法、解析の方法などは、取り組むべき研究対象によって違ってくるのですが、いずれにしても、個人または人の集団が目標達成のために研究を推進しているという原点は大切に参りたいと考えております。

退任にあたって

前所長 坂井 健吉

きます。

先ず第1は、研究者と施設や圃場管理を担当している行Ⅱの人達との関係です。将来、どれ位の施設や圃場を使用するか明確ではありませんが、少なくともそれらを用いて研究を行う場合、研究の成否は一にかかって施設や圃場で働く行Ⅱ職員の協力いかにあります。そこで研究者は、その研究や作業の意義付けを十分説明して実施するようにしなければならないということです。仕事の意義付けがわからなくては、意欲が出る筈はなく、また行Ⅱの人達も仕事を通して研究を理解し、研究者の苦しみが判るというものです。

第2は、研究者と庶務、会計、用度を担当している行Ⅰの人達との関係です。研究の円滑な推進、成果の取りまとめ、PRには行Ⅰ職員の協力がなくてはなりません。とくに特殊物品の調達には、研究者はカタログ、図面、説明書等、十分の配慮をする必要があります。また諸報告書や業績記述書は、研究者はもっと判り易い表現を用いて自分の行っている研究を記述し、PRする必要があります。オリジナリティを要求される学術論文ではないのですから、この点十分な配慮をして、研究を理解してもらうように努めることが大切です。

第3は研究者間の問題です。環境研は旧農技研の人が大部分で、蚕糸試等他場所の人は少ないが、それでも今回の再編整備により、相当の人が入り混じりました。このことはメリットもありますが、デメリットもあります。何分にも、今までの「農業における技術上の基礎的調査研究」という漠然たる目標ではなく、「農業生態系の実態解明と農業生態系のもつ国土や環境の保全機能を定量的に把握して、農業環境の評価手法や管理手法を具体的に開発する」という明確な目標を持って、これからの研

究に取り組むことになっています。このため研究の領域や手法が、今までと異なった人達が相当にいると思います。したがって、互いに研鑽努力して自己能力の向上に努めることはいうまでもありませんが、農業生態系という広大な研究対象を相手にするのですから、環境研全体の研究者が一致協力して、研究に取り組んでほしいわけです。具体的には全所セミナーなどをはじめ、種々の問題解決には組織にこだわらず、プロジェクト研究チームを組んで研究推進を図ることができるようになれば、大変理想的だと思います。

とはいいいましても、これからの環境研の研究は生やさ

しいものではないと思います。ライフサイエンス、エレクトロニクス、材料科学、情報科学等、理工学的な研究領域の思考や手法を極めなくてはなりません。互いに仲良く、励まし合って努力しても、恐らく大変苦しい人達も沢山出てくると思います。研究者には、それぞれの得手、不得手があり、得意な場がある筈です。自分の得意な場で活躍することが、将来のためには最も良いことですので、お互い話し合い、思い切って他場所に得意な場を求めることも考えなければならないと思います。

(昭和59年 5月16日)

農業環境技術研究所の概要

(1) 設立のねらい

高密度社会化の進展は我が国の農業生産環境に大きな影響を与えており、土壌や水質の汚染等の困難な問題が生じている。一方で、農業内部においては肥料、農薬等の多投が地力の低下等を招いている。このような状況に対処して、安定的な農業生産を確保していくためには、自然のしくみを巧みに利用し、これをコントロールするという自然の生態系と調和のとれた農業技術の開発を推進して、農業生産力基盤の培養を図ることが必要であり、またこのことが、国土、自然環境の保全にも資することとなる。

このような技術開発のためには、気象、土壌、昆虫、微生物等の環境要素の特性の解明のみならず、これらの環境要素の相互の関連性にも着目した総合的な環境管理技術が必要であるが、自然環境の複雑なしくみをトータルに解明する技術は、近年着実に進展をみせるようになってきているところでもあり、このための試験研究体制の整備の必要性が最近になって急速に高まっている。

このような情勢に対応して、今回、農業環境技術研究所を設置することとしたものである。

(2) 主な研究内容

- ① 農業気象、土壌、水質、植物、微生物、昆虫等の農業の環境を構成する諸要因の特性の解明
- ② 複雑な自然のしくみを巧みに活用した形での地力の

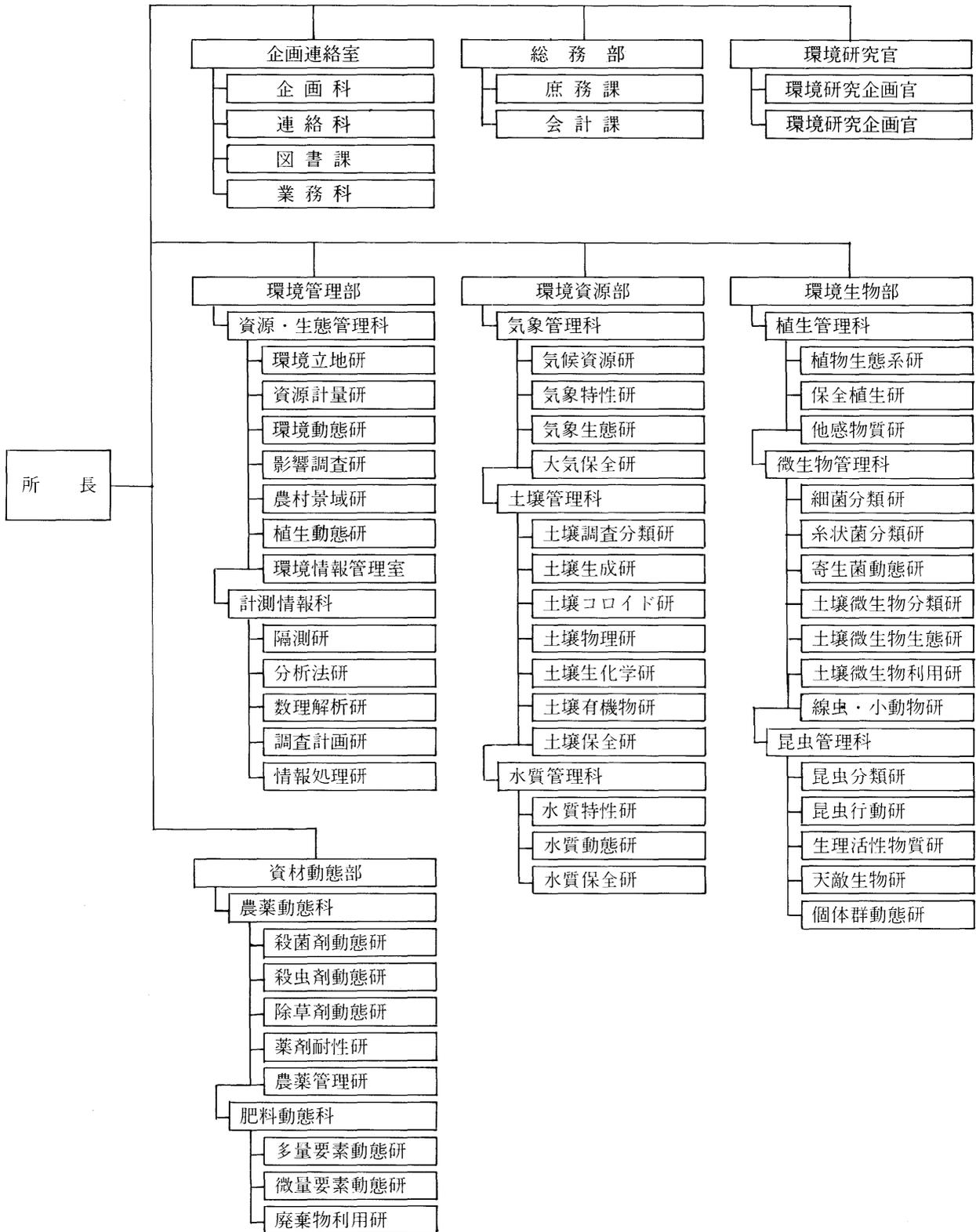
維持向上、病虫害防除等を行う農業技術の開発

- ③ リモートセンシング等最新技術の活用等による農作物の生育環境の総合的な管理法の開発

(3) 定員

		59年度 定員総数 239	
指定職 1 (0.4%)	行Ⅰ職 46 (19.2%)	行Ⅱ職 21 (8.8%)	研究職 171 (71.6%)

(4) 組 織



研究部の“科”紹介

環境管理部 資源・生態管理科

当科の担当課題は農業環境の総合的な評価と管理に関する研究となっている。云わば総合屋である。しかし多くのスタッフにとって総合屋は初めての経験であり、とまどうことが多い。総合化の研究にとって大切なことはしっかりとした問題意識をもつことと、目的を明確にしたうえで、多くの分野の研究者が協力し合うことであろう。さらに、一般化するためには逆のようだが、より具体的な研究の場を設定して、そこに生じている具体的な事象について研究を進めることが必要である。

土壌、植生、動物および数理統計など多くの分野の研究者を集めた当科にとって必要なことは、具体的な研究の場での協力である。このため、例えば牛久沼周辺の農業環境の調査を、科内プロジェクト的に開始している。悪く言えば寄り合い世帯の6研究室1管理室の将来を決めるのは、科内での相互協力と、他部からの研究支援であろう。発足以来半年にしてようやく固まってきた各研究室の主な研究内容は次の通りである。

環境立地研究室

自然立地条件からみた農業環境の総合的な評価手法の開発が課題だが、当面はスタッフのこれまでの経験を生かし、土壌情報システムの作成法とその利用、農業のもつ環境保全機能の総合的評価法、さらには土地資源の構成要素の相互関係の解明等の課題を担当する。従来の環境研究がなかなか及ばなかった一定の広がりをもった土地を対象に研究を進めて行こうとしている所に、当研究室の特色がある。英名Land Evaluationである。

資源計量研究室

農業環境資源の機能の計量と総合的評価手法の開発が当研究室の課題である。当面はプロジェクト研究「国土資源」において、耕地における洪水防止機能の計測や傾斜農地における地表面出水の制御技術の開発の課題を担当するほか、地域エネルギーの利用を進めるための調査法の開発などを進めることにしている。英名Resource Evaluationである。

環境動態研究室

当研究室の英名はAgroecosystem Dynamicsで、この

方が分かりやすい。農業生態系における物質やエネルギーの動態の解明が主要課題である。スタッフの経験を生かし、数理解析的な手法を用いて課題に取り組むこととしており、システムモデルを用いた動態の解明や、ナショナルレベルでの有機物の循環の実態の解明などを当面の課題としている。

影響調査研究室

各種インパクトによる農業環境の変化を総合的に予測・評価する手法の開発が課題である。農業生態系における物質循環にたいして各種のインパクトが与える影響の予測と評価や最近の農業環境への著しいインパクトの一つである都市化の影響を解明することなどを課題としており、都市化の著しい牛久沼周辺の環境変動を解明しようとする科内でのプロジェクトの中心的研究室である。英名Impact Assessmentである。

農村景域研究室

当研究室の英名Rural Landscapeから、景観や風景の研究を担当するようであるが、そうではない。景域の用語はドイツ語のLandschaftの訳語であり、自然的、文化的事象からみて同様な一定の広がりをもった土地を意味する。したがって本来総合的な概念であり、当科の中で最も総合度の高い位置をしめる研究室である。その課題は農村景域の評価であるが、景域要素のリモートセンシングによる計測法や景域に及ぼす外的インパクトの評価と予測などを当面の課題としている。

植生動態研究室

農耕地とその周辺地域の植生の分布と動態に関する研究が課題であるが、植生管理科との課題の重複をさけるため、農業生態系における農用林の動態と機能の解明を当面の課題としている。したがって単に植生にとどまらず、鳥や小動物など植生の動態にかかわりあいを持つ、生物についても研究対象とすることとしている所に、当研究室の特色がある。英名Vegetation Dynamicsである。

環境情報管理室

農業環境に関する情報の収集、整理、保管及び提供と、

情報管理システムに関する研究が課題であり、きわめて幅広い内容をもっている。スタッフの現状から当面は研究室段階に役立つ小規模情報管理システムの開発に的を

しばって研究を進めることとしている。英名Information Management である。

環境生物部 植生管理科

植生管理科は、農業生態系に含まれる耕地や草地の植生とその周辺の植生を主な研究対象として、生態学的あるいは環境保全的な見地から、植生-環境系の構造や機能などを明らかにし、そこに存在する植生の望ましい状態とは何か、これはどうすれば管理できるのか、これらを明らかにしようとして設置されたと考えている。

日本では、1960年代の列島改造論のでた高度成長期ほどではないが未だ相当、速い速度で農用地の開発が進められている。これが環境の破壊でなく本当に農地の基盤造成だろうかと思いたくなる場面も各地に散在している。しかし、科学的な根拠をもってどのような状態が生態系として復元可能な開発や利用の許容範囲であるか、明確な解答をあたえられないのが現状であろう。

植生の組成や構造は、自然的あるいは人為的環境の変化とともに変動・遷移している。各種の環境条件下において植物群落を構成するいろいろな植物の種生態的な研究、群落の分布や構造あるいはそれらの環境の変化に伴う季節的・年次的な動態を研究することによって、植生をつうじた環境の状態診断や指標化が可能になると考えている。作物群落や牧草群落においても作物や牧草の状態のみならず、それらに付随して出現する雑草群落の動態は診断や指標化の重要な研究の対象である。また、環

境に適合すると考えられる植生であっても農業生態系にあっては生態的機能すなわち気候緩和機能・水保全機能あるいは物質浄化を含む物質循環機能などで高い機能をもつ植生が求められている。これらの機能を植生の構造とあわせて解析することによって環境保全的にすぐれた植生も明らかにすることができると考えている。

また、植生の動きはたんに自然的あるいは人為的環境の変化のみならず、植物の分泌する化学物質すなわち他感物質によっても制御されている。このことは外国の研究では良く知られているが、日本では遅れている研究分野の一つである。連作障害のない合理的な作付体系・生態的雑草防除や病虫害防除さらには作物の共栄関係の利用による増収効果など、この化学生態学の研究分野は今後に期待されて環境保全的農業の展開には重要であると考えている。

植生管理科は、植物生態系研究室・保全植生研究室・他感物質研究室の三研究室体制である。発足当初で当面これらの基礎となる研究を実施し、将来はその応用技術に発展させたいと考えているが、現状の体制では応用技術にまで到達するには、相当の年月を要するものと考えている。先輩諸氏の今後の御指導・御支援を期待してやまない。

刊行物の紹介

下記に紹介する刊行物は、昭和58年度中に刊行された「農業技術研究所報告及び資料」です。

既に御承知のとおり、農林水産省設置法の一部改正により、昭和58年12月1日から「農業環境技術研究所」及び「農業生物資源研究所」が発足したのに伴い農業技術研究所は廃止になりました。

報告 A (物理統計) 第 31 号(最終号)(昭58.10)

報告 B (土壌肥料) 第 35 号 (昭58.10)

報告 B (土壌肥料) 第 36 号(最終号)(昭59.3)

「農業技術研究所報告及び資料・シリーズA, B, C, D」のうち、「報告」A及びBは昭和58年度中に最終号が刊行され、既に廃刊になりました。「報告」C及びDは夫々農業環境技術研究所及び農業生物資源研究所から昭和59年度中に最終号が刊行され廃刊になる予定です。なお、「資料」も各シリーズすべて廃刊になりました。

報告 C (病理昆虫) 第 38 号 (昭58.10)

報告 D (生理遺伝) 第 35 号 (昭58.10)

資料 B (土壌肥料) 第 18 号 (最終号)(昭58.6)

「筑波農林研究団地新研究体制発足記念式典」及び 「農業環境技術研究所発足記念祝賀会」開催さる。

6月11日筑波事務所において、山村農林水産大臣御臨席の下、「筑波農林研究団地新研究体制発足記念式典」が開催された。

式典終了後、山村農林水産大臣は農林研究団地の諸研究所を視察された。

農業環境技術研究所においては、インセクトロン棟にて、所長の説明を受けられ研究員の行う実験を熱心に見

学された。

同日農業環境技術研究所において、「農業環境技術研究所発足記念祝賀会」が開催された。

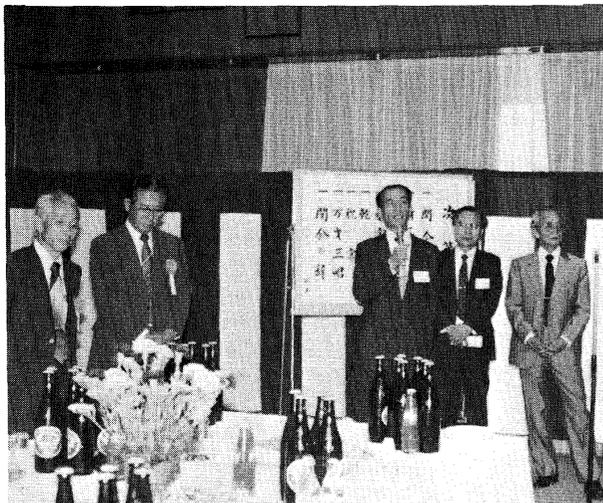
祝賀会には、児玉元所長、坂井前所長始め多数のOBの方々が御出席になり、所員と共に歓談のひとときを過ごされた。



山村農林水産大臣、熱心に御見学



農業環境技術研究所発足記念祝賀会（1）



農業環境技術研究所発足記念祝賀会（2）



農業環境技術研究所発足記念祝賀会（3）

企画連絡室連絡科日より

春の一般公開(科学技術週間)

今年の科学技術週間は4月16日(月)から4月22日(日)であった。4月19日(木)には筑波農林研究団地の一般公開が催された。今回は“農業環境技術研究所”としては、初めての公開であった。

見学順路は玄関ホールでの研究内容を紹介するパネルの供覧、リモートセンシング析解室、病理昆虫標本館、土壤保全・モノリス実験棟、同じ構内にある農業生物資源研究所の遺伝資源種子貯蔵庫とした。

リモートセンシング室では、リモートセンシングの解説パネルを見た後、人工衛星ランドサットから送られてきた信号を画像にしてブラウン管に写し出す画像解析装置の実演があった。ブラウン管には、関東地方の市街地、農耕地、樹林、水面などが色分けして写し出された。ここが筑波研究学園都市、これが霞ヶ浦等の説明が、見学者の興味をひいた。

昆虫標本館には、約70万点の農業昆虫標本が収蔵されているが、公開では外国から日本に密かに入り定着したイネミズゾウムシ、ミナミキイロアザミウマその他の侵入害虫や、日本への侵入を厳しく警戒しているチチュウカイミバエの標本などが展示された。また、採集した昆虫は、どのように整理されて、学名の同定された標本と

なって行くか、実物を示して説明された。その緻密で、根気の要る仕事は強い印象を与えた。さらに、昆虫標本が分類、分布調査だけでなく、生理生態の研究に使われた記録としても重要な意味を持っていることを理解してもらえたと思う。

土壤モノリス館には、北海道泥炭土から沖縄の赤色土まで、全国各地約60の土壤断面標本が展示されている。地元谷田部町の黒ボク土は上層の腐植層が40cm前後の比較的薄い所が多く、その下は黄褐色の下層土となっている様子も見ることができた。農業を支える土壤が地中でどのような姿をしているのかを知ることで重要な展示物である。

見学者はこのあと、農業生物資源研究所の遺伝資源種子貯蔵庫をみて、玄関前の巡回バス乗場へ戻った。

今年の公開日は生憎、冷たい雨が降り、桜の花は大幅に遅れ未だ咲いていなかった。例年多い中高生が非常に少なかったが、来訪者数は253人で、わずかながら昨年を上廻った。一般の来訪者が多くみられたのは、科学技術週間の一般公開が、定着して来たものと思われる。

人 事 (59.1.1~59.6.20)

採 用

59. 3. 1	大水 豊司	企画連絡室業務科
59. 4. 1	竹澤 邦夫	企画連絡室企画科
〃	川方 俊和	〃
〃	小原 洋	〃
〃	矢口 直実	庶務課人事第2係
〃	野内 勇	環境資源部・大気保全研究室主任研究官(東京都公害研究所)
〃	小野崎康裕	環境生物部

59. 4. 1	栗原 淳	資材動態部肥料動態科長(福井県農業試験場長)
〃	腰岡 政二	資材動態部・農業管理研究室
59. 5. 16	大久保敏子	環境管理部

転 入

59. 1. 1	岩元 明久	環境管理部・環境動態研究室(官房秘書課)
59. 2. 1	秋山 豊	環境資源部・土壤コロイド研究室長(九州農業試験場)
59. 3. 1	久保田 徹	環境資源部・土壤物理研究室

長（中国農業試験場）

59. 3. 1 升田 武夫 資材動態部・殺虫剤動態研究室長（九州農業試験場）

59. 4. 1 小野田 功 企画連絡室図書課長（家畜衛生試験場）

〃 大塚 寛雄 総務部長（関東農政局）

〃 児玉 芳郎 会計課長（家畜衛生試験場）

〃 児玉 進 会計課主計係長（畜産試験場）

〃 徳留 昭一 環境管理部・環境立地研究室長（四国農業試験場）

〃 尾崎 保夫 環境管理部・影響調査研究室主任研究官（大阪大学）

〃 加福 領二 環境資源部・気象特性研究室長（農業研究センター）

〃 谷口 義雄 環境資源部・土壌コロイド研究室主任研究官（農業研究センター）

〃 本間 善久 環境生物部・土壌微生物生態研究室主任研究官（四国農業試験場）

〃 澤田 泰男 環境生物部・土壌微生物利用研究室長（草地試験場）

〃 田中 喜之 資材動態部・薬材耐性研究室（名古屋大学）

〃 後藤 重義 資材動態部・微量要素動態研究室長（九州農業試験場）

59. 5. 1 荒澤 作哉 会計課用度係長（東北農業試験場）

59. 6. 1 日高 輝展 環境生物部・昆虫行動研究室主任研究官（熱帯農業研究センター）

転 出

59. 2. 1 櫻谷 哲夫 環境資源部（九州農業試験場・気象災害研究室長）

59. 3. 1 川崎 弘 環境管理部（九州農業試験場・土壌肥料第4研究室長）

〃 風野 光 資材動態部（九州農業試験場・虫害第2研究室長）

59. 4. 1 村田 伸夫 企画連絡室連絡科（農業生物資源研究所・生育遺伝子研究室長）

〃 浅井 堂朗 企画連絡室図書課（農業研究センター・情報資料課長）

〃 柳原 清 庶務課（農林水産技術会議事

務局総務課任用係）

59. 4. 1 安藤 高廣 会計課（宮崎統計情報事務所宮崎出張所総務係長）

〃 三土 正則 環境管理部（農業研究センター・土壌診断研究室主任研究官）

〃 堀江 武 環境資源部（北陸農業試験場・農業気象研究室長）

〃 山本 克巳 環境資源部（中国農業試験場・土壌肥料第2研究室主任研究官）

〃 中島 秀治 環境資源部（東北農業試験場・土壌肥料第2研究室）

〃 鮫島 良次 環境資源部（農業研究センター・気象災害研究室）

〃 園田 亮一 環境生物部（東北農業試験場・病害第2研究室）

〃 越野 正義 資材動態部（草地試験場・土壌肥料第2研究室長）

59. 5. 1 梅本 俊雄 庶務課（農業研究センター・用度課用度係長）

〃 村井 敏信 環境管理部（茶業試験場・製茶第1研究室長）

〃 鬼木 正臣 環境生物部（茶業試験場・病害研究室主任研究官）

〃 堀江 悦子 資材動態部（北陸農業試験場・資料課）

59. 6. 1 三橋 淳 環境生物部（林業試験場・天敵微生物研究室長）

退 職

59. 1. 17 原島 敏夫 会計課施設管理係（死亡）

59. 3. 31 山添 文雄 資材動態部肥料動態科長

59. 4. 1 井上 迪 総務部長

〃 川畑 謙 庶務課長

〃 山田 裕 環境資源部・土壌調査分類研究室長

59. 5. 16 坂井 健吉 農業環境技術研究所長

59. 6. 1 三幣 正巳 資材動態部・廃棄物利用研究室主任研究官

59. 6. 19 大澤 たけ 会計課用度係主任

所内異動（カッコ内、異動前役職名）

59. 1. 1 井上 建紀 庶務課人事第1係（会計課支

出係)

59. 1. 21 富澤長次郎 資材動態部付(資材動態部・主任研究官)

59. 4. 1 守中 正 企画連絡室連絡科長(環境生物部・糸状菌分類研究室長)

〃 内島 立郎 企画連絡室業務科長(環境資源部・気象特性研究室長)

〃 高田 哲雄 庶務課長(会計課長)

〃 岡田 和彦 会計課支出係(環境生物部)

59. 5. 1 淵野久美子 企画連絡室(環境資源部)

〃 小林 真信 庶務課庶務係長(会計課用度係)

〃 矢口 直実 環境資源部(庶務課人事第2係)

〃 山本 満枝 資材動態部(企画連絡室)

59. 5. 16 久保 祐雄 農業環境技術研究所長(環境研究官)

〃 鬼鞍 豊 環境研究官(環境資源部土壤管理科長)

〃 田中 恵司 庶務科人事第2係(会計課用度係)

〃 中島たけ代 会計課支出係(環境管理部)

〃 田口 広喜 会計課用度係(会計課支出係)

〃 速水 和彦 環境資源部土壤管理科長(同部水質管理科長)

〃 小林 宏信 環境資源部水質管理科長(環境管理部・分析法研究室長)

59. 6. 12 安田 壮平 環境生物部付(環境生物部・昆虫行動研究室長)

〃 日高 輝展 環境生物部・昆虫行動研究室長(同部・昆虫行動研究室主任研究官)

併 任

59. 1. 1 加藤 好武 環境管理部(企画連絡室)

〃 石原 暁 環境資源部(企画連絡室)

〃 釜野 静也 環境生物部(企画連絡室)

〃 田中 房江 資材動態部(企画連絡室)

〃 岡田 和彦 環境生物部(会計課支出係)

59. 4. 1 守中 正 企画連絡室(環境生物部・糸状菌分類研究室長)

〃 陽 捷行 環境資源部(農林水産技術会

議事務局)

59. 4. 1 山田 忠男 資材動態部(農林水産技術会議事務局筑波事務所)

併 任 解 除

59. 3. 31 津村 昭人 環境資源部(農林水産技術会議事務局筑波事務所)

59. 4. 1 内島 立郎 環境資源部(業務科長)

〃 井上 君夫 環境資源部(農林水産技術会議事務局筑波事務所)

〃 岡田 和彦 環境生物部(会計課支出係)

派 遣 復 帰

59. 4. 20 神山 啓治 環境管理部・環境動態研究室主任研究官(台湾57.4.20~59.4.19)

派 遣 延 期

環境資源部 千葉 守男 59.3.17~60.6.6(パラグアイ)

資材動態部 奈須 壮兆 59.3.22~60.6.17(インドネシア)

派 遣 職 員

環境管理部 今井 秀夫 58.2.4~60.2.3(台湾)

〃 谷 信輝 58.4.16~59.9.30(大韓民国)

環境資源部 千葉 守男 57.10.7~60.6.6(パラグアイ)

〃 矢澤 文雄 58.10.20~60.10.23(インドネシア)

環境生物部 安田 壮平 59.6.12~60.6.17(インドネシア)

資材動態部 奈須 壮兆 56.3.22~60.6.17(インドネシア)

〃 富澤長次郎 59.1.21~60.1.20(ジャマイカ)

農環研ニュース 創刊号 昭和59年7月1日

発行 農業環境技術研究所 〒305 茨城県筑波郡谷田部町観音台3-1-1 電話 02975-6-8148(庶務係)

印刷 (株)エリート印刷